

動物たちの“同定”の経緯 ①

「元初まりの話」は、人間世界創造の話であるとともに、人類救済のために解き明かされた真実の話でもある。この話にはさまざまな水域性動物たちが比喩的に登場する。それらは現存する動物であったり、想像上の動物であったりするが、そのこと自体は特に問題ではない。あくまで、私たちが真実の話を理解・納得しやすいようにと、身近な動物の生態や形態、神話をとおして、解き明かされたのである。

そもそも「元初まりの話」は、教祖が「元のいんねん」と「よふきづとめ」の理を理解させようと、私たちに初めて明かされたのである。そして、私たち人類の誕生の経緯とその理由がこの中に示されていること、また「陽気ぐらし」世界への実現に向けた「いんねん」の自覚と「つとめ」の理を、しっかり心におさめることを、私たちに強く促されたのである。

本シリーズでは、この「話」の中に比喩的に登場する水域性動物と「十全の守護」との関連性・必然性について、さまざまな視点から整理し考察してきた。特に、「十全の守護」の解き明かしのさい、親神はなぜ水域性動物を引き寄せたのか、なぜこの動物でなければならなかったのか等について、これまで個別に述べてきた。

そのさいに考慮していたのは、登場する水域性動物は、幕末から明治にかけて生活していた当時の人たちに、普通に理解できた動物であり、比較的身近な生き物だったということである。だからこそ、当時の人たちは、登場する水域性動物の特性から「十全の守護」を理解できたのではないかと考える。それは、今日では思いつかない動物であったりすることもある。

幕末の頃、寺子屋や藩校などへの就学率は80%ほどで、国民全体の識字率はそれ以上だったと考えられている。当時、フランスでは就学率が数%、イギリスでも大都市でさえ25%以下だったことから、日本での就学率がいかに高かったかがわかる。その頃の日本に、水域性動物が紹介され詳細なイラストが数多く描かれていた本として、1712（正徳2）年、寺島良安によって編纂された百科事典、『和漢三才図会』がある。本シリーズでは、水域性動物の同定のさいには、本書の内容を基本に判断した。

たとえば、「うを」をなぜサンショウウオと判断したかについて、以下にその経緯を示す。

分析した18篇の“こふき”資料から「うを」に該当する“ぎぎよ”の異表記は、全部で23種類、54例だった。しかし「ぎぎ」で始まる表記は全体のわずか6例（11%）にすぎなかった。むしろ、「げいぎよふ」「げぎよふ」「ぎいぎよふ」の表現は全体の85%を占め、この分類群の中に、より正確な表記名が含まれていると考えた。さらに整理すると、「げいぎよ」という表現におさまった。この表現に該当する動物は、「鯨魚」と「鮠魚」の二つに絞られた。

そこで「鯨」は、『和漢三才図会』では、「海中の大魚である。大きくて海に横たわり舟を呑む。海底の穴に住んでいる。……鯨の大きなものは長さ千里もあり、小さなもので数丈」と記されているように、「大魚」とはいえ、魚類とは異なる「鯨」という認識だった。

一方、『和漢三才図会』の「鮠」の項には「さんせういお」というルビを入れたオオサンショウウオのイラストが描かれている。中国では、今でもサンショウウオのことを「鮠魚」と表現する。ちなみに、大和地方では戦後の間もない頃まで、カスミサンショウウオ（小型サンショウウオの1種）のことを「畑ドジョウ」と呼んでいた。このことから、「鮠魚」は山椒魚と考えた方が妥当だと判断できた。

そこで、カスミサンショウウオやオオサンショウウオのような山椒魚が、本当に「男雛型・種の理」の「うを」なのか、再び“こふき”資料に戻って検証をおこなった。着目したのは、山田伊八郎が明治15年にまとめた『聞問記』である。写本が比較的多く残されている“こふき”資料のなかでも、この『聞問記』は、明治15年1月、山田伊八郎が“こふき”話を教祖から直に聞き、同年8月か9月にまとめたものとされている。このことは、道友社編『先人の遺した教話（三）根のある花・山田伊八郎』（1982年）の序文「本書を読まれる人のために」の中で、金子圭助氏が述べている。

『聞問記』の中の「古記」に、「うを」の形態や行動が記されていることから、以下にその部分を引用する。

これからハ、世界こしらい にんげんをこしらいるにハ、道具ひながたみだすもよふ。其どろ海なかをよくみすませバ、うお（ママ）とみいとがまじりいて、このうをハ にんげんのかおで うろこなし。からだハ人間のはだやいで、それゆへに 人ぎうとゆふ。また ぎふげふともゆふ。このうをの かたの処に ゑらがあり、此うをハ、よこいもよらす あといも もどらすに、ただむこいへと いくと斗り。（『根のある花・山田伊八郎』18頁）

この「古記」には、「うを」は「……にんげんのかおで うろこなし。からだハ人間のはだやいで、人ぎうとゆふ」と記されている。魚のように鱗がなく、人間の顔に似ていることから人魚という、とある。『和漢三才図会』の中で「鮠」は、「四足を持った人魚で、……俗に山椒魚と言う」と説明されている。実際、サンショウウオは体の表面には鱗はなく、人間の肌のようにつるつるで、人間的な愛嬌ある顔をしている。ドジョウ（泥鰌）が生息する浅い水域で一時的に混棲し、そのような場所で繁殖する。四足をもつ「畑ドジョウ」と呼ばれる所以である。

また、この「うを」には「……かたの処に ゑらがあり」とある。山田伊八郎文書の『教祖様御言葉』の「神様の仰せ」（明治18年7月19日）にも、「魚のかたの処、ゑらが有」と同じような表現がみられる。肩のところに鰓があるのは、サンショウウオの幼生のように有尾両生類の特徴で、カエルのオタマジャクシには見られない。同様に、魚類の鰓も体内にあるため見られない。さらに、サンショウウオの幼生が水中で泳ぐときの動きは、魚のように自由に動き回ることとはできず、前へ前へと進むような泳ぎ方しかできない。

このように、「うを」はどのような動物を想定していたのかの結論は、『和漢三才図会』や山田伊八郎文書、さらには生態学的知見から総合して、サンショウウオという結果になった。

本シリーズでは、このようにして動物を特定してきたのである。